

*** 島義勇(しま よしたけ)について

札幌市役所 1 階ロビー南東側に立つ、高さ 4m 余に及ぶ大きな銅像をご存知の方も少なからずおられるであろう。明治初頭、北海道開拓に先駆けて札幌本府を構想し、まちづくりに尽力した開拓判官・島義勇が、現在の北海道神宮辺りの丘に立って構想を描いている姿とされる。明治 2(1869)年、開拓使がおかれて国による北海道経営・開拓が始まり、間もなく 150 年を迎えようとするこの時期、改めて島義勇を表舞台に登場させようとする動きが見られる。

島義勇は、文政 5 年 9 月 12 日(1822 年 10 月 26 日)、肥後国、佐賀城下精小路(しらげこうじ、現佐賀市与賀町)で佐賀藩士の長男として誕生、文政 13(1830)年から藩校・弘道館に学び、弘化元(1844)年に 23 歳で家督を継ぐと 3 年間諸国を遊学、帰国して藩主鍋島直正の外小姓、弘道館目付となり、さらに江戸へ遊学した。

安政 3(1856)年 9 月、北からのロシアの脅威に鑑みて蝦夷地経営に関心が深かった藩主鍋島直正の命により蝦夷地調査に出発し、安政 4(1857)年 5 月 11 日から 9 月 27 日まで道内、樺太を調査、「入北記」を著す。その後、慶応 4(1868)年佐賀藩・御船方(海軍)軍監、下野鎮圧軍大総督軍監として新政府の東北征討に従い、明治新政府が誕生すると、明治 2(1869)年 5 月 22 日会計官判事のまま蝦夷開拓御用掛に任じ、7 月 13 日藩主・鍋島直正が開拓使長官に就任すると、7 月 22 日開拓判官に任命された。48 歳の秋、11 月 10 日には小樽銭函経由で札幌に到着、札幌を本府と定め、建設に着手し、その構想は、厳冬期に構想図「石狩大府指図」、「石狩国本府指図」としてまとめられた。しかし、高齢・病気の鍋島直正に代わり開拓使長官となった東久世通禧との経営方針の相違がその原因とされるが、明治 3(1870)年 2 月 11 日には召還の命により離札している。

以後、明治政府により大学少監、明治天皇侍従、秋田の初代県権令に任命されており、特に、秋田県権令時代には、対ロシア戦略上八郎潟を軍港として築港する構想の実現に奔走したが、当時の明治政府の財政状況に鑑み井上馨大蔵卿の理解を得ることはできなかった。札幌のまちづくり構想といい、ここにも国土計画を志向した島の足跡が残されている。

そして、新政府への不満を持つ郷里佐賀の情勢を鎮静させる密命を受けて、江藤新平(天保 5 年 2 月 9 日(1834 年 3 月 18 日)～明治 7(1874)年 4 月 13 日)とともに現地へ赴くも、その党首に担がれることとなり、武士の一念を貫いて、明治 7(1874)年 4 月 13 日、佐賀の乱で没することとなる。53 歳の生涯であった。

ところで、島は、札幌に赴任してきたとき、コタンベツの丘(現円山)に登り、開拓使の本拠地となる本府造営の決意を漢詩に詠んでいる。

将に府を開かんとし
地を石狩国札幌郡中に相す(しょうす)、
賦して以て祝る(いのる)

河水遠流山峙隅 河水遠く流れて 山隅(すみ)に峙(そばた)つ
平原千里地膏腴 平原千里 地は膏腴(こうゆ)
四通八達宜開府 四通八達(しつうはったつ) 宜しく府を開くべし
他日五州第一都 他日五州 第一の都

詞書には、本府を開くために札幌に来たと述べている。

遠く河水がゆるやかに流れ、一方の隅に山がそびえている。

ひろびろとした平原が千里の彼方まで続き地味は豊かである。

北海道の各地へ道を通じるに便であり、まさに首府をおくに最適である。

いつの日か、おそらく世界第一の大都になるであろう。

(北海道神宮奉賛会発行「島義勇漢詩集北海道紀行」)

そして、札幌本府の建設は、島の確かな構想と気宇壮大な精神とともに、わずかに在札3か月の間に築いた実務者との信頼関係によって着実に進められ、のちに北海道庁初代長官となる岩村通俊に引き継がれて、今日の札幌発展の礎となっていた。

こうした島の功績から、札幌市役所と北海道神宮には顕彰銅像が、円山公園には顕彰碑「島判官紀功碑」が建立されており、命日の4月13日には北海道神宮で「島判官慰霊祭」が毎年催されている。加えて、先般、図らずも佐賀の乱で亡くなって140年、命日に北海道神宮ほかで、その功績を讃える集いが開かれたと報道された。市民有志でつくる開拓判官島義勇顕彰会が主催したもので、佐賀県からも要人が参加して、大正5(1916)年の従四位追贈以来の顕彰の動きに、島義勇の功績・人物像を表舞台に浮かび上がらせようとする新たな流れが加えられた。

いっぽう、市役所の銅像は、巷間、島の最期の経緯を慮って人目を憚り、市庁舎のなかに置くよう配慮したと伝わるが、晴れて札幌市庁舎の外庭で、いつ何時でも万人に顕彰されるようになるのはいつの日のことであろうか。開道150年の節目に向けて実現が期待される。



札幌市役所ロビーを望む(?)島義勇像

離道したのちも島判官を慕う人々の手で植えられた円山公園の桜が、今年も、可憐な花を咲かせ、その生きざまそのままに潔く散っていく季節を迎えようとしている。

20160414 MS生

(参考)本府建設への熱い心情を吟じた漢詩(「北海道紀行」)

北道は曆を知らず 積雪は荒叢に満つ
交友の少なきを恨まず 小屋の一樽が同なり
誰が言う 佳味無しと 盤肉青熊を煮る(ばんじくせいゆうをいる)
我が人生 真の楽しみを存し 従来窮すれば 通ずるに任す
堂々大府を創め(はじめ) 将に神宮を営まんとする
あまねく五方の士を集め 濟々百工来る(きたる)
物産原野に満て 百種豊かな歳とす
南は中原(ちゅうげん)の土を護り 北はよく魯戎(ろじゅう)を鎮める
この荒莫の地を開き 長く開国の功を奉らん

